

死を見ること

Edgar Allan Poe “The Facts in the Case of M. Valdemar”
と視覚の欺瞞性

福 島 祥一郎

Abstract

Poe’s oeuvre contains three mesmeric stories: “A Tale of the Ragged Mountains,” “Mesmeric Revelation,” and “The Facts in the Case of M. Valdemar.” All of them were written between 1844 and 1845, indicating the depth of Poe’s intense interest in mesmerism during that period. Curiously, despite being written around the same time, each deals with mesmerism differently. By altering his treatment of mesmerism across these texts, and by creating one of his most gruesome scenes in the last mesmeric tale, what questions did Poe mean to ask? In this study, I focus on the relationship between “Valdemar” and Poe’s criticism on myopia in his tales. I argue that “Valdemar,” which is often considered as a hoax, not only critically delineates fears regarding the rapid growth of science and technology but also criticizes the deception of sentimentalism and the American sublime in Poe’s era.

1. 序

Edgar Allan Poe の “The Facts in the Case of M. Valdemar” (1845) は、数あるポーの小説の中でも最もグロテスクな物語のひとつであろう。特にその結末における Valdemar の腐敗した肉体の描写は、醜悪さの点で際立っており、前年に書かれ、同じくメスメリズムをモチーフとした作品 “Mesmeric Revelation” (1844) の結末とは著しい対照をなしている。

“The Facts in the Case of M. Valdemar” の結末部分

As I rapidly made the mesmeric passes, amid ejaculations of “dead! dead!” absolutely *bursting* from the tongue and not from the lips of the sufferer, his whole frame at once — within the space of a single minute, or even less, shrunk — crumbled — absolutely *rotted* away beneath my hands. Upon the bed, before that whole company, there lay a nearly liquid mass of loathsome — of detestable putridity. (CWIII 1242-43)¹

“Mesmeric Revelation” の結末部分

As the sleep-waker pronounced these latter words, in a feeble tone, I observed on his countenance a singular expression, which somewhat alarmed me, and induced me to awake him at once. No sooner had I done this, than, with a bright smile irradiating all his features, he fell back upon his pillow and expired. I noticed that in less than a minute afterward his corpse had all the stern rigidity of stone. (CWIII 1040)

基本的な枠組みだけを考えれば、主人公の Valdemar も Vankirk も共に慢性の肺結核 (confirmed phthisis) を患っており、死期が迫っている点で非常に似た状況にある。また語り手は、“Valdemar” では P —、“Mesmeric Revelation” では P と表記され、ともに作者ポーを連想させる。それぞれの患者が臨終を迎えるにあたってメスメリズムを施している点でも変わらない。さらに、メスメリズムによって眠った患者が、肉体的な死を迎えてもことばを発し続けているという点でも類似している。にもかかわらず、それぞれの物語の結末は驚くほどに異なっている。もちろん、細かく見れば二つの物語にはいくつも相違点があるのだが、一読し比較してみたときまず感じざるを得ないのは、どうして発表年数で一年ほどの差しかない同一モチーフの作品がこれほどまでに異なる結末を迎えるのか、という素朴な疑問である。

“Valdemar”も“Mesmeric Revelation”も共に、発表当時、そこに書かれている内容が「真実」であると受け取る読者が少なからず現れ、特に“Valdemar”はそのセンセーショナルな死の描写と報告調の文体、さらには作者ポー自身が読者から真義を問われた際意図的に曖昧な返答をしたこともあり、しばしばホークス（ほら話）に分類されてきた。しかしながら、ホークスの文脈、あるいは後の H. P. Lovecraft やホラー映画への影響関係という文脈だけには収まらない異質さ、特異さが“Valdemar”という物語にはあるのではないだろうか。

本論考では、ポーが描き出したそのほかのメスマリズム物語とは一線を画す“Valdemar”について、ポーの批評家としての側面から迫ってみたい。1839年頃を境にポーは政治・社会批判を物語上でも展開し、次第にその色を強めていくが、それはアメリカ社会における対象の浅薄な認識の仕方への批判、ある種の認識論的批判であった。「見ること」について極めて自覚的であったポーは、「見る」ということが必然的に含みこむ「見ていない」点、つまり視覚が持っている欺瞞性に鋭敏な意識を持っていた作家でもある。

“Valdemar”において、ポーはゴシック的な意匠を借りて当時のセンチメンタリズムや科学的合理主義へ警鐘を鳴らすのが、その一方で、Valdemarの死の過剰なまでの物質性はサブライム美学が持つ「見ること」への過度の依存とその陥穽を批判的に描き出しているようにも思われる。*Eureka* (1848) までつながる“Mesmeric Revelation”の形而上的な想像力とは対照的な、“Valdemar”における死を眺める視線について考えてみたい。

2. 社会風刺としての後期ポー文学

J. Gerald Kennedy は近著 *Strange Nation: Literary Nationalism and Cultural Conflict in “the Age of Poe”* (2016) の序文において、そのやや奇異にさえ響くサブタイトルについて次のような説明を付している。

With some temerity I have called the era of 1820-50 “the age of Poe” — not because Poe was the dominant cultural presence or even the greatest writer of his generation (why are such claims even made?) but because his fierce resistance to nationalistic literature signals his awareness of the potential monstrosity of nationalism itself. More than any other writer of that epoch, Poe trafficked in the grotesque and had an uncanny ability to discern what was truly strange about the American nation. (x-xi)

1820年から50年という時代を「ポーの時代」と呼ぶかどうか別としても、ポーがナショナリズムの怪物性を自覚しており、ネーションの奇妙さがどういったものであるかを見分ける力を有していたという指摘は、大変示唆に富むものであろう²。

ポーは特にその文学キャリアの後半において、アメリカ合衆国の無邪気で盲目的なナショナリズムの在り方について、批判的な姿勢を示していた。いまだ「気味が悪く」「ぞっとする」ような物語の作者というイメージが根強いポーではあるが、ケネディが同書で繰り返し指摘するように、1839年の“The Man That Was Used Up”以降、特に1842-43年を境として、それまでの「外国」に材をとる文学的手法から転換し、アメリカを直接的な題材とする風刺作品を多く出版し始める。もちろんそれは、アメリカの拡張主義を背景としたナショナリズムの高まりにおいて、アメリカに材をとることの「商業的価値」をポーが認識していたということもあっただろう (Kennedy *Strange* 378)。しかしながら、都市人口の爆発的増加や1837年以降の経済不況と社会状況の変化は、ポーをして否応なくそうした問題に向き合わざるを得ないほど深刻であった。ポーは次第にアメリカ社会のあり様への憂慮を深め、シニカルに、しかし極めてものごとの本質をとらえた批評を展開していく。

また、1844年にニューヨークへと六年ぶりに戻ったポーは、ニューヨークにおける文壇闘争に巻き込まれていくが、このこともポーの文学的転機をより促していったと考えられる³。例えば、著作権法についてはヤングアメリカ派や民主党支持者に共感を抱いていたポーだが、一方で「ヤングアメリカ派の狭いアメリカ的テーマに対する熱狂や、彼らの熱烈なナショナリズムには嫌悪を抱いていた」(Kennedy 377)。また特に、その年の大統領選挙において、テキサス併合をもくろむ民主党とそれを批判するホイッグ党の激しい論戦は、好戦的愛国主義(jingoism)に対して批判的であったポーを難しい立場に追いやってしまう。周囲の文学者と歩調を合わせなければ、食べていくのにも困ってしまうが、自分の意見は異なっている、というジレンマ。その中で、ポーは自らの批評的精神をより直接的に作品に反映させ、いくつもの風刺的物語を産み出していく。とりわけ、その年の末には書き上げられたと言われる“Some Words with a Mummy”(1845)は、ガルバニック・バッテリーによりミイラを蘇らせたところ、そのミイラがアメリカの進歩主義や大衆の民主主義社会の在り方について批判を繰り返すという、極めて明確な政治・社会風刺を展開している。

もちろんポーの後期において、例えば“The Cask of Amontillado”(1846)など風刺性を感じにくい作品もある⁴。しかしながら、おおむねこの文学的傾向は1849年まで途切れることなく続いていくこととなる。それは最晩年の風刺物語“Mellonta Tauta”(1849)を見ても明らかであろう。さらに、1849年3月のJames Russel Lowellの*A Fable for Critics*に関する書評において、ポーは「私たちアメリカ人は風刺文学(Satire)の点でこれまで何を成し遂げてきたであろうか?」という問いを投げかけ、アメリカにおける真の風刺文学の欠乏、および風刺が奨励されることのないアメリカの社会を嘆いてもいる(*E&R* 814-22)。少なくともポー文学後期が、こうしたアメリカという国のあり様と、その社会に対しての疑問を抱え、アメリカへの批判と風刺をその底流につねに抱え続けていたのは間違いないように思われる。

3. 視覚の欺瞞性

さて、私たちの関心の本筋は“Valdemar”にあるわけだが、“Valdemar”が書かれた時代的背景、つまり1839年“The Man That Was Used Up”以降、「アメリカ的な」ものを扱う方向へとその重心を移し、“Valdemar”が執筆された1845年前後にアメリカ社会への風刺物語をいくつも出版していたということを考えあわせれば、“Valdemar”についての見え方も少なからず変わってくるのではないかと思われる。

ポーは厳しい資本主義アメリカ社会の中において生き残っていくため、したたかな戦略のもと、例えばセンセーショナリズムを批判し、それを喰いつつ、そのセンセーショナリズムを利用したが、その批判は決して場当たりのなものではなく、ひとつの思想として、作品を経るごとにポーの文学の底流を形成していった。このことは、ホークスの要素を持ち合わせている“Valdemar”も例外ではないだろう。結論を先取りすれば、ナショナリズムを含むアメリカの社会状況へのポーの批判的な視座は“Valdemar”にも連綿と流れているように思われるのである。

それを考えるうえで、最も重要かつ参考となるポーの批評的視座が「視覚の欺瞞性」ではなかろうか。ポーはこの「視覚の欺瞞性」について、ポーの後期文学、とりわけ“Valdemar”の書かれた1845年前後に、繰り返し物語やスケッチにおいて描き出している。例えば、ポーの最も人口に膾炙した探偵小説である“The Purloined Letter”（1844年9月）には、次のような地図の挿話が登場する。

“There is a game of puzzles,” he [Dupin] resumed, “which is played upon a map. One party playing requires another to find a given word — the name of town, river, state or empire — any word, in short, upon the motley and perplexed surface

of the chart. A novice in the game generally seeks to embarrass his opponents by giving them the most minutely lettered names; but the adept selects such words as stretch, in large characters, from one end of the chart to the other. These, like the over-largely lettered signs and placards of the street, escape observation by dint of being excessively obvious; and here the physical oversight is precisely analogous with the moral inapprehension by which the intellect suffers to pass unnoticed those considerations which are too obtrusively and too palpably self-evident.” (*CWIII* 989-90; 強調は引用者による)

この挿話はそのま推理の核心である「盲点原理」の説明ともなっているが、私たちにとって重要なことは、これが〈近視眼的なもの見方〉の批判にもなっているという点である。地図の端から端まで広がる名前を見つけようとすれば、それは細部にフォーカスしていたのでは決して発見することはできない。そこにあるということ、それを知覚するということの絶対的な乖離ともいえる。この〈もの見方〉の基本原理はその年の3月に発表されていた“Spectacles” (1844年3月)においても展開され、さらに、“Valdemar”のすぐ後に出版された“The Sphinx” (1846年1月)においても、同様のモチーフが見られる。また“The Sphinx”では、その近視眼への批判が政治社会的な批判にまで発展していることも見逃すことができない (*CWIII* 886-87; 1249-50)。

I remember his insisting very especially (among other things) upon the idea that the principal source of error in all human investigations, lay in the liability of the understanding to under-rate or to over-value the importance of an object, through mere misadmeasurement of its propinquity. “To

estimate properly, for example,” he said, “the influence to be exercised on mankind at large by the thorough diffusion of Democracy, the distance of the epoch at which such diffusion may possibly be accomplished, should not fail to form an item in the estimate. Yet can you tell me one writer on the subject of government, who has ever thought this particular branch of the subject worth of discussion at all?” (*CWIII* 1249-50)

このように概観してみると、ポーの批判は視覚、あるいは知覚といった認識論に関する傾向が顕著であり、それが時に政治論にまで繋がっていることに気づく。また、“Valdemar” 執筆の前後にこうした認識論的批判についていくつもの作品が書かれていることも注目に値するだろう。このことから、“Valdemar” が単に読者を煙に巻き、あるいは欺くための物語であるというだけにはとどまらない批判性、〈視覚の欺瞞性〉を土台としたある種の批評の展開を見ることができないのではないか、という仮説もなりたちうるように思われる。

4. 死を見ること

では、具体的に視覚の問題と “Valdemar” はどのようにつながりうるだろうか？

一読する限りでは、“Valdemar” には〈視覚の欺瞞性〉、あるいは〈見ることの問題〉という問題意識は感じられない。「眼」への言及は少なくないけれども⁵、ポーの他の物語における眼の描写の多さ、あるいは “The Black Cat” (1843) における黒猫の片目をペンナイフで抉り出してしまふ凄惨で強烈なイメージに比べれば、“Valdemar” における「眼」の描写は至って普通である。しいて言えば、mesmerism の催眠に落ちた Valdemar の身体描写の際、語り手の “are you sleep?” に対して反応した “the eyelids unclosed themselves so far as to display a white line of the

ball” (CWIII 1238) という描写が少し不気味な程度であろうか。

しかしながら、〈見ること〉の問題はむしろ“Valdemar”のテキストの内奥に埋め込まれているように思われる。

この点を考えるうえで、語り手PーとValdemarの関係の希薄さは重要である。注意深くテキストを読んでみると、PーとValdemarの関係は、他の二つのメスメリズム作品とは異なり、二人の間の rapport (感情的な親密さ) がうまくいっていないことを匂わせる。Valdemarの意志は mesmerism によってまったくPーの意のままにはならず、千里眼的な見通す能力 (clairvoyance) の観点でも何ら信頼できる業績を残せない。また、Valdemarは語り手Pーの実験に協力はしてくれるものの、「語り手のやっていることに共感 (sympathy) を示す」ことはない。つまり、語り手PーはValdemarとの感情的なつながりを得ることができず、Valdemarがどのようなことを考えているのかを垣間見ることさえできないのである。

Valdemarの不明さ、わからなさは、Valdemarの人物情報からも読みとれる。極めて詳細で、過剰とも言える人物描写がある一方で、その情報はどこかかみ合わないところがあるからである。「法廷弁論叢書」とも訳されうる“Bibliotheca Forensica”の編纂者でありながら、シラーの1799年作の戯曲“Wallenstein”、およびラブレの風刺小説“Gargantua”をポーランド語に訳すという設定の不可解さ。Harlaem在住で、下半身がJohn Randolphに似ており、髪はかつらのような真っ黒、それとは対照的な真っ白な髭をした老人とはどのような人物を想起すればよいのだろうか。この不可解な設定は、そのごちゃまぜ具合が読者をからかっているとして、ホークスの証左と受け取られることもあるが、逆にValdemarのアイデンティティをより不明瞭なものとし、その他者性を際立たせているようにも思われる。この関係性の希薄さと他者性は、“Mesmeric Revelation”には見られないものである。

さらに言えば、“Mesmeric Revelation”のVankirkは形而上的なこと

ばを引き出すため、自ら語り手に mesmerism の施術を依頼するが、Valdemar はそうではない。Valdemar はあくまで受動的に実験を引き受けるのであって、その意味でも実験対象という存在を免れられないのである。このことが、“Mesmeric Revelation” で可能であった神の始原のことは引き出す妨げとなっている。それゆえ、“Mesmeric Revelation” がポーの形而上学的対話物語である“The Conversation of Eiros and Charmion” (1839) や“The Colloquy of Monos and Una” (1841)、そして最晩年の *Eureka* へとつながるのに対し、“Valdemar” はそうした形而上性から引き離されてしまう。

“Valdemar” では“Mesmeric Revelation” で形而上的世界を媒介していたものの異質さばかりが強調され、その物質の奥にあるはずの世界を見通すことはできない。肉体的な死の兆候が見られた後、Valdemar の声はもはや声とは呼ばず、この世ならぬ舌の振動が、あたかも遠くへだたった、“some deep cavern within the earth” (CWIII 1240) から聞こえてくるようであり、そのゼラチンのような、にかわのような、粘つく印象は腐敗する肉体を連想させるだけである。そして Valdemar の死は7カ月の間 mesmerism によって繰り延べにされた末、悲惨な結末をもたらす。

しかしながら、本当に死の期間を引き延ばされていたのだろうか。あるいはそれはそう見えていただけかもしれない。Valdemar の様子を毎日観察しながら、語り手と医師たちはその裏で起こっていることについて見通すことができないからだ。ここに Lynda Walsh や Martin Willis が指摘する合理的な科学主義への批判を読み取ることも可能だろう。だが、それ以上に注意したいことは、“Valdemar” という作品が世界を決してあるがままには観ることのできない人間の視覚、あるいは知覚そのものの限界性を暴き出していることだろう。そこでは、死を悼むことすら忘れられ、ただ死は外部性の直面として、あるいは変異していく腐敗物としてあるばかりである。

5. センチメンタリズム批判とゴシック美学の変容

この死の床での凄惨な光景を眺めることしかできない結末は、ポーの時代におけるセンチメンタリズムの物語がもつ欺瞞性への批判でもあるだろう。

センチメンタリズム批判としてのポー読解にはすぐれた先行研究が存在する。例えば、前述のケネディは1984年の著作 *Poe, Death and the Life of Writing* において、宗教が衰退し世俗化する社会の死に対する不安、およびその不安を解消するためのセンチメンタルな deathbed シーンについて詳述し、死のあり様の変化とポー作品の関連性を論じている。ただし、ケネディは“Valdemar”について直接的には論じていない。その欠落を補ったのが Jonathan Elmer である。

エルマーは1995年に Shawn Rosenheim と Stephen Rachman の編集による画期的な論文集 *The American Face of Edgar Allan Poe* に寄せた論考において、センチメンタル・ノヴェルが一つの社会的プログラムとして mourning（嘆き）を誘発していたことを指摘する。苦悩の共感を人々の間に呼び起こし、人間の理性以前の感情的つながりを確たるものにしようとするひとつの進歩的イデオロギーとして、その社会的プログラムは大きな役割を果たしていた。それに対し、ポーの物語は、その苦悩にのみ焦点を当て、感動的な共感の場面を恐怖や不安、嫌悪の場へと変えてしまう、とエルマーは指摘する。

In the eighteenth and nineteenth centuries the sentimental novel induced mourning as a social program, one serving a liberal ideology that, in provoking sympathetic distress, aims to affirm a prediscursive, prerational unity of human feeling. In Poe's hands, the tale programmatically zeroes in on the distress itself and aims to restrict itself to that. [...] But if the sentimental novel aims to make affective sympathy—

which is, as it well knows, constitutively social, collective — safe for the bourgeois individual by his fire, the Poesque tale occasionally manages to make that latter image itself the site of horror, or anxiety, or revulsion. (Elmer “Terminate” 94-95)

その最たる例としてエルマーは“Valdemar”を挙げ、Stoweなどのセンチメンタルな物語との対比を試みる。その上で、“Valdemar”のあまりに凄惨でグロテスクなラストシーンに内在するラカンのthe Realを指摘し、センチメンタリズムが覆い隠そうとした「なまの現実」を描き出していると結論づける。

もちろん、センチメンタルな物語にも時代の必然性がある。近代化に伴い死との向き合い方が大きく変化していった18世紀後半から19世紀にかけて、死に対する当時の人々の戸惑いは想像に難くない。ゆえに、それを軽々に否定することはできない。しかしながら、それを考慮に入れたとしても、センチメンタリズムにはひとつの大きな問題がある。それはおそらくその過剰性と自己欺瞞性だろう。ポーが繰り返し作品内で語っている〈視覚の欺瞞性〉とは、本来はそこにあるものが知覚できず、またそこにあるものに過剰に意味を読み込んでしまうということであったが、センチメンタリズムの問題もその構造を一にしている。センチメンタリズムを可能にするものとは、死というものに対して過剰に意味を読み込みつつ、それがあたかも「リアル」と錯覚してしまうこと、あるいはその錯覚を知覚していたにもかかわらず、錯覚しようとする擬制の中で意識的に、あるいは無意識的にそれを忘れ去り、結果自らを欺くことだからである。

さらに重要なことは、この問題系がアメリカン・ピクチャレスクの問題、つまりナショナリズムと容易に繋がってしまうピクチャレスクとその美学(サブライム美学)の問題にまで繋がってしまうことである⁶。

かつて柄谷行人は近代の風景を論じた著作の中国版序文において、カント

の『判断力批判』における「サブライム＝崇高」について、「崇高は、対象にあるのではなく、感性的な有限性を乗り越える理性の無限性にある」(313)と述べた。つまり、崇高は対象に内在しているのではなく、理性の無限性によってはじめて成立するものだ、ということである。しかしながら、不快な対象を崇高という快に変えているのは「主観の能動性」であるということは忘れられ、いつの間にか「無限が主観にではなく対象そのものにあるかのようになら」されてしまう。この逆転のことを柄谷は「転倒」と名づける。

ポーはこの崇高における「転倒」についても非常に意識的な作家であった。そのことは、“Morning on the Wissahiccon (the Elk)”という作品をみるだけでも明らかであろう。1843年の夏ごろまでには執筆され、1844年にニューヨークの*The Opal*という雑誌に発表されたこのスケッチは、未踏のアメリカ的ピクチャレスクだと感じられた風景の中で大鹿 (elk) と出会うが、実はその鹿は近隣に別荘を所有しているイギリス人に飼われていた鹿であったという皮肉な結末で物語を閉じる。この皮肉な結末は、アメリカン・ピクチャレスクが対象に存在するのではなく主観の無限性のうちにあることを描出し、サブライム美学の陥穽を見事に描き出している。

こうした問題意識は、“Valdemar”においても「ゴシック美学の過剰さ」として現れているように思われる。Valdemar はゴシック的な意匠を借り、「不快」が「快」に転換するサブライムの心的機構を利用するが、それを極限まで推し進めるが故、“Valdemar”では恐怖が美的な「快」に収まることなく、それを通り越し、嫌悪にまで達してしまう。フィクションと言うひとつの「安全な」制度のなかにあるために、ゴシック物語においては通常、その恐怖は崇高美的な「快」を保証されるのに対し、フィクションと事実との境界をあえて曖昧にした書き方がなされる“Valdemar”では、不安や恐怖が「快」へと転換される足場は取り外されている。Stephanie Sommerfeld が“*How to Write a Blackwood Article*”に関して論じた結末部分にてポーのサブライムについて概観していることは、まさに“Valdemar”にもあてはまる

だろう。

Poe's sublime is thus much more than a decorative Gothic remnant and lies at the core of his critique of American modernity because it refuses the experience of immediacy, questions the notion of human mastery, and problematizes the modern world order by dramatizing that sublime objects as media, too have agency. (42)

ただし“Valdemar”では、それをより過剰に、よりシリアスにした形で現れる。まさにポーのサブライムとは「彼のアメリカの近代性への批判の中心に位置するもの」なのである。

6. 結び

Andrew Smith は *Gothic Death 1740-1914: A Literary History* (2016) において、18世紀後半以降ゴシック文学（特にイギリスのゴシック文学）には死を「書くこと (writing)」から死を「読むこと (reading)」への大きな流れがあることを示し、その歴史においてポー文学がひとつの分水嶺であったことを指摘した。特に19世紀中庸は、世俗化していく社会の中で宗教的な死のイメージが衰退し、死の意味を想像力の中で新しく書き直していくロマン主義的試みが、死を観察し、死を解釈していく行為と次第に変容していくほかなかった時代である。そのような変化のただ中であって両者の才能を多分に持ちあわせていたポーは、苦悩し、引き裂かれていたであろう。巽孝之は「頁の都市工学」の冒頭にて、ロマンティシズムとモダニズムの対照こそがポーの本質であると述べているが(61-62)、そうであれば、ポーの二つのメスメリズム作品で展開されるアンビバレントな態度こそは、まさにポー文学の本質を私たちに明らかにしてくれているのではないだろうか。

*本稿は、2018年5月26日開催されたアメリカ文学会東京支部2018年度5月例会(於：慶応義塾大学三田キャンパス)での発表「死を見ること Poeの“The Facts in the Case of M. Valdemar”におけるゴシック美学の変容」に加筆修正を施したものである。

註

- 1 本稿ではポーの作品は *Collected Works of Edgar Allan Poe: Volume II and III*. Edited by Thomas Olive Mabbott. The Belknap Press of Harvard UP, 1978に拠った。以後、*CW II*、あるいは *CW III* という記号とページ数のみを文末に記載するにとどめる。
- 2 1830年代から40年代のアメリカは、アメリカの知的独立が叫ばれ、独自の文化構築への道筋が形成されていく一方、アメリカの拡張主義政策などによりナショナリズムの気運が形成され、それが雑誌文学のありようにも大きな影響を与えていた。
- 3 野口啓子によれば、ポーは「ロングフェローを旗印に掲げたルイス・ゲイロード・クラークの『ニッカーボッカー』と、文壇の大御所ロングフェローに反発して「若きアメリカ」を唱えたエヴァート・ダイキンクの『デモクラティック・レビュー』という、ニューヨーク文壇を二分する文学グループの激しい対立に巻き込まれて」いった。(25-26)
- 4 しかしながら John Gruesser は、“The Cask of Amontillado”にもポーの批評性を読み取り、当時ポーが書いた *Doings in Gotham* (1844) と “Literati of New York City” (1846) という二つの批評との関連性を指摘している。(145-66)
- 5 “Valdemar”において“eye”という語は6回登場する。また、眼球を表す“ball”は1回、そして眼の虹彩を表す“iris”は1回用いられている。ちなみに“Mesmeric Revelation”にはまったく眼の言及はない。
- 6 Edmund Burke によって定義されたサブライム (= beauty とは異なる美意識、delight を生み出す戦慄美) は、19世紀に入ると大西洋を越え、アメリカ合衆国で大いに人気を博することになる。19世紀中頃より相次いで発表されたハドソン・リヴァー派によるアメリカ風景画群は、アメリカの「手付かず」(のように思われる)自然の景観をナショナルな風景へと変貌させていった。それは、高所から俯瞰的に対象を眺める「眼差しの美学」であり、恐怖さえ覚える光景をアメリカに固有な崇高美へと変換していく行為でもある。これは、マニフェスト・デスティニーに心的基盤を置くアメリカの領土拡張運動と相まって急速な拡大を見せていた。

参考文献

- Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*. Edited by Adam Phillips. Oxford UP, 1998. 『崇高と美の観念の起原』中野好之訳、みすず書房、1999年。
- Elmer, Jonathan. *Reading at the Social Limit: Affect, Mass Culture, and Edgar Allan Poe*. Stanford UP, 1995.
- , "Terminate or Liquidate?: Poe, Sensationalism, and the Sentimental Tradition." *The American Face of Edgar Allan Poe*, edited by Shawn Rosenheim and Stephen Rachman, The Johns Hopkins UP, 1995, pp.91-120.
- Falk, Doris V. "Poe and the Power of Animal Magnetism" *PMLA*, Vol.84, No.3, May 1969, pp.536-46. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/1261142>.
- Gilmore, Paul. *Aesthetic Materialism: Electricity and American Romanticism*. Stanford UP, 2009.
- Gruesser, John. "Outside Looking In: Edgar Allan Poe and New York City." *Poe and Place*, edited by Philip Edward Phillips, Palgrave Macmillan, 2018, pp.145-66.
- Hurh, Paul. *American Terror: The Feeling of Thinking in Edwards, Poe, and Melville*. Stanford UP, 2015.
- Kennedy, J. Gerald. *Strange Nation: Literary Nationalism and Cultural Conflict in "the Age of Poe"*. Oxford UP, 2016.
- , *Poe, Death and the Life of Writing*. Yale UP, 1987.
- Lind, Sydney E. "Poe and Mesmerism." *PMLA*, Vol.62, No.4, Dec. 1947, pp.1077-94. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/459150>.
- Ljungquist, Kent P. "'Valdemar' and the 'Frogpondians': The Aftermath of Poe's Boston Lyceum Appearance." *Emersonian Circles: Essays in Honor of Joel Myerson*, edited by Wesley T. Mott and Robert E. Burkholder, U of Rochester P, 1997, pp.181-206.
- Mills, Bruce. *Poe, Fuller, and the Mesmeric Arts: Transition States in the American Renaissance*. U of Missouri P, 2006.
- Poe, Edgar Allan. *Collected Works of Edgar Allan Poe: Volume II and III*. Edited by Thomas Olive Mabbott. The Belknap Press of Harvard UP, 1978.
- , *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*. Edited by G. R. Thompson. Library of America, 1984.

- , *The Letters of Edgar Allan Poe I & II*. Edited by John Ward Ostrom. Gordian, 1966.
- Smith, Andrew. *Gothic Death 1740-1914: A Literary History*. Manchester UP, 2016.
- , *Gothic Radicalism: Literature, Philosophy and Psychoanalysis in the Nineteenth Century*. Macmillan, 2000.
- Sommerfeld, Stephanie. "Post-Kantian Sublimity and Mediacy in Poe's *Blackwood Tales*." *The Edgar Allan Poe Review*, Vol.13, No.2, Fall 2012, pp.33-49. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/41717104>.
- Sova, Dawn B. *Critical Companion to Edgar Allan Poe: A Literary Reference to His Life and Work*. Facts On File, 2001.
- Stadler, Gustavus. "Ejaculating Tongues: Poe, Mather, and the Jewish Penis." *The Puritan Origins of American Sex: Religion, Sexuality, and National Identity in American Literature*, edited by Tracy Fessenden, Nicholas F. Radcliff and Magdalena J. Zaborowska, Routledge, 2000, pp.109-26.
- Walsh, Lynda. *Sins against Science: The Scientific Media Hoaxes of Poe, Twain, and Others*. State U of New York P, 2006.
- Willis, Martin. *Mesmerists, Monsters, and Machines: Science Fiction and the Cultures of Science in the Nineteenth Century*. the Kent State UP, 2006.
- Whalen, Terence. *Edgar Allan Poe and the Masses*. Princeton UP, 1999.
- 伊藤紹子『ディズナル・スワンプのアメリカン・ルネサンス——ポーとダークキャノン』音羽書房鶴見書店、2017年。
- , 「ポーと新たなサブライムの意匠」武藤脩二・入子文子編『視覚のアメリカン・ルネサンス』世界思想社、2006年、pp.101-124。
- 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』岩波現代文庫、2008年。
- カント、イマヌエル『判断力批判』(上)・(下) 篠田英雄訳、岩波文庫、1964年。
- , 『プロレゴメナ』篠田英雄訳、岩波文庫、1977年。
- タタール、マリア・M『魔の眼に魅されて——メスマリズムと文学の研究』鈴木昌訳、国書刊行会、1994年。
- 巽孝之「頁の都市工学」巽孝之・鷺津浩子・下河辺美知子『文学する若きアメリカ——ポウ、ホーソーン、メルヴィル』南雲堂、1989年、pp.61-87。
- 野口啓子「ポーと雑誌文学」野口啓子・山口ヨシ子編『ポーと雑誌文学——マガジニストのアメリカ』彩流社、2001年、pp.9-31。
- ポオ、エドガー・アラン『ポオ小説全集』Ⅲ・Ⅳ、創元推理文庫、1974年。

宮川雅「[[疑似科学] 科学と疑似科学の境」八木敏夫・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』研究社、2009年、pp.251-267。

八木敏夫『アメリカン・ゴシックの水脈』研究社、1992年。